

# 根腐れ対策

# 光合成細菌

崇城大学（熊本市）の大学院生らが起業した株Ciamo（シアモ）が製造・販売する、「光合成細菌」培養キット「くまレッド」が人気だ。光合成細菌を含む液体は、作物の生育を助け、根腐れを抑えるとされる。これまでは価格が高かったが、同社は焼酎かすを使ったことで従来価格の5分の1以下での販売を実現。全国から注文が来ている。社長を務めるのは、同大

# 焼酎かすで安価実現

大学院博士課程（応用生命科学）の古賀碧さん（25）。古賀さんは2017年、クルマエビの養殖に光合成細菌を生かす研究に着手。その後、県内のイ草農家から「地域に適した光合成細菌を作って」との相談をきっかけに、農作物に適した光合成細菌の研究も始めた。18年には大学の後押しもあり、Ciamoを起業した。光合成細菌は、稲やイ草、レンコンなど水田で栽培する作物の根腐れ対策に役立つ。野菜などの生育に



もいとされる。だが、従来は10畝当たりの価格が3000〜6000円と高く、購入をためらう農家も多かった。

そこで古賀さんが目を付けたのが、球磨焼酎の製造過程で生まれる焼酎かすだ。光合成細菌は培養に養分が必要。焼酎かすはこれまで使っていた魚や肉のエキスより購入価格が安く済む。

さらに焼酎かすと光合成細菌を培養キットにして販売。農家自らが培養すること

で、10畝換算で540円という低価格が実現した。農家は「くまレッド」を使えば1、2週間で光合成細菌を増やせる。農業専門雑誌などで取り上げられたこともあり、認知度が上昇。

ネット販売などを通して全国で約150戸の農家が利用している。生育の実証例を重ねるため、米の試験栽培も実施。協力する八代市の米農家、早川博秋さんは「光合成細菌を使うことで米の収穫が増えるなどの効果があった。次は栽培面積を増やすなどして確かめたい」と期待を寄せる。

同社の技術顧問を務める同大の宮坂均教授（応用生命科学）は、「球磨地域の焼酎かすにこだわり、地域貢献にもつながっている。実証の事例を積み重ね、良さを広く知ってもらうことが課題だ」と指摘する。

同社は現在、タイの水田で光合成細菌の実証実験も進める。将来的には東南アジアでの販売も視野に入れる。栽培した農産物を、熊本市のイベントに出品する取り組みも昨年から始めた。

古賀さんは「現在は数百万円の売り上げだが、5年後は1億円を目標にしている。ネット販売を強化し、地域に貢献できる企業になりたい」と話す。（くまもと）

同大の宮坂均教授（応用生命科学）は、「球磨地域の焼酎かすにこだわり、地域貢献にもつながっている。実証の事例を積み重ね、良さを広く知ってもらうことが課題だ」と指摘する。

## 熊本 大学院生起業

Ciamoの古賀さんと培養キット「くまレッド」

同社の技術顧問を務める同大の宮坂均教授（応用生命科学）は、「球磨地域の焼酎かすにこだわり、地域貢献にもつながっている。実証の事例を積み重ね、良さを広く知ってもらうことが課題だ」と指摘する。

同社は現在、タイの水田で光合成細菌の実証実験も進める。将来的には東南アジアでの販売も視野に入れる。栽培した農産物を、熊本市のイベントに出品する取り組みも昨年から始めた。